

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	23
都道府県名	愛知県

(    )  
 該当する観点にチェックをすること

・学校名及び規模

設楽町立市設楽中学校										
	1年	2年	3年				特殊学級	計	教員数	
学級数	2	2	2				2	8	16	
生徒数	42	44	53				3	142		

・実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の趣旨）

<p>・主題（テーマ）                  明日を拓く確かな学び 評価を生かした授業づくり</p> <p>・テーマ設定の趣旨                  「生きる力」を 確かな学力（教科の基礎・基本） 主体的に問題解決する力 共に生きる力と考え、この三つの力を身につけさせることが、明日を拓く確かな学びにつながると考えた。</p>
---

・実践研究の内容について（選択した観点を中心に記述）

( ) 研究体制の工夫

設楽中では、主題に迫るために「学力向上検討委員会」と「総合的な学習検討委員会」を組織し研究を推進している。教科の中心は、全学年数学と1年英語であるが、教科部会として、「国語・数学・英語」「理科・社会」「音楽・技家・体育」（美術は非常勤講師であるので含めない）の3部会を構成し、すべての教員が研究に携わるように配慮している。以下、数学を例にあげて、研究の内容にふれたい。

( ) 実践研究の内容

数学科 「わかる喜びを味わえる数学の授業」

－ 評価を生かし、個に応じた支援のためのTT指導を通して －

数学では、全クラス、全授業に2人の教師で臨んでいる。「生徒を見つめる目」「一人一人の生徒と接する時間」が増え、多くのメリットを感じている。評価についてもTTのよさを生かした評価ができればと考え、「わかる喜びを味わえる数学の授業」をめざし、次のように実践を行ってきた。

生徒の実態から

本校の生徒のよいところは、「学習に集中して取り組んでいる」「わかりたい、

という意欲がある」「ねばり強く取り組む」「お互いに教え合う気持ちがある」である。しかし「発言が一部の生徒にかたよっている」「自分がどうやって考えたかを発表するのが苦手」「結果にこだわる」という現状もある。そこで、自分の考えをもつ時間を保障し、間違いを生かせる場面を作り、そこから人の意見について考えを深め合うことで、「できた」「わかった」という喜びを一人でも多くの生徒に感じさせたいと考えた。

#### 評価の面から

評価は、授業での生徒たちの様子をとらえ、その累積を成績として生徒たちに返していくためのものであると同時に、つまずきを明らかにし、生徒がわかる喜びを感じられるように支援するためのものである。授業の中でどんな力をつけさせたいのか、何を評価するのか（目標）を絞り、2人の教師間で共通理解をして、授業に臨む必要がある。それが、ゆとりをもって、一人一人に合った支援をすることにつながると考える。

#### 研究の目標

生徒の様子をとらえ、支援するためには、どの場面で、どんなTT指導が有効なのかを明らかにする。

#### 研究の仮説

評価する人数、評価の観点を絞って授業に臨むことで生徒たちの姿をより明確にとらえ、それを生かして一人一人に合った支援をすることで「わかる喜び」を味わうことができるだろう。

#### TT指導の形態

次のような形態をとることで、授業中に教師が1人、または2人で評価、支援をしながら生徒の様子をとらえることができると考えた。また、生徒の振り返りのプリントなどをもとに、教師同士が生徒の様子について話し合うことで、一人一人に合った支援方法が見えてくると考えた。

#### ア 主と補の立場で（一斉指導）

(ア) わからない生徒にヒントを与えたり、その部分について詳しく説明したりする。

(イ) 集中できない生徒の意欲を喚起する。

(ウ) 個の意見を全体へ取り上げる。

(エ) 生徒の立場で意見を出し、話し合いの内容や考えを焦点化する。

(オ) 上位生徒にゆさぶりをかける。（応用問題の提示）

#### イ 等質グループに分かれて（一斉指導）

生徒同士の教え合いの場面を大切にし、その様子を捉えるために、T1、T2で分担をして支援、評価を中心に行う。

#### ウ 習熟度別のグループに分かれて

(ア) 単元を通して分かれて学習

##### T1 チャレンジコース

学習内容を総合的にとらえ、問題演習を中心に理解を深めていく。

中学校では学習しない内容や入試問題にもチャレンジする。

T 2 がっちりコース

実験や具体物を用いたり既習事項とかかわらせたりして学習内容を一つずつ押さえていく。

(イ) 単元終盤の問題演習...同じ課題

T 1 自力解決グループ.....自力で解決、類題に挑戦する。

ヒントグループ(生徒主体).....困ったときにヒントをもらいながら解決していく。

T 2 アドバイスグループ(教師主体)...考えていく筋道を教師が生徒たちと対話しながら確認していく。

エ 計算問題でのドリル学習...違う課題

T 1 ぐんぐんコース

たくさんの問題を解決することに重点を置く。基本、発展問題など、さまざまな問題に取り組む。教師は丸付けをし、直しは基本的に自力でやる。

T 2 がっちりコース

基本問題に取り組む。既習事項を振り返りながら、確実に解決できるように助言していく。教師はポイントを指導したり、丸付けのときに考えていく過程を聞きながらアドバイスしたりする。

( ) 成果と課題

設楽中の研究の良さは、数学の例でもあるように、T T 指導をいろいろな形態でとらえ、単元や生徒の実態に合わせて使い分けているところにある。このことで生徒たちもいろいろな学習形態を経験し、教師と共に学習を選択したり創造したりする力が養われると考える。また、個に応じる指導に力を入れながら、生徒同士がどうかかわるのか(学び合うのか)といった視点で、授業を構想しているところにも、研究の独自性を感じる。

課題として次のことがあげられる。

- ・ 習熟度別学習における生徒の意欲を喚起するような教材の工夫。
- ・ 評価規準による評価と生徒が行う自己評価との関係・関連のおさえ。
- ・ 学力向上をどのように把握していくか。

( ) 成果の普及方策

設楽中では、平成15年11月5日に研究発表会を予定している。もちろんその場で研究の成果を発表するわけであるが、14年度のまとめを各校に配布するなどして普及にあたりたい。